



リリカルの証明

-Proof of the Lyrical-





WARP Co Presents

Proof of the Lyrical

For **ADULT** Only




リリカルの証明

-Proof of the Lyrical-



!! 注意 !!

この本に登場する人物は全て
18歳以上の大人です



「マズハ自己紹介シテモラオウカ」
「……ほ、僕、ユーノ・スクライアで
す…。無限…書庫の司書長で…
…その…あの……」
「ソコデヨドムノ、ヨクナイ モット
リュウチョウニ」
「……っ！こ、こんな格好でそんな
こと…」
「言ウトオリニシナイト君ノモダ
チ、ミンナヒドイコトニナル」
「くっ……」
「サア、モウイチド」
「…僕は、ユーノ・スクライア……む、
無限書庫の司書長で……お、男の
子なのに犯されるのが好きな…
へ、変態マゾ奴隷……です。これか
ら僕のい、淫乱プレイを……ご覧
く……ください……っ！」



「ソレジャマズハ、コレヲシャブツテ
モラオウカ……(ポロンッ)
「ひっ!?(な、ナニコレ……?こん
な大きな……)」
「コレ、先ニヨクシャブツテオカナ
イト後デヒドイ……」
「ひ、ひどいって……」
「ユーノケツマ〇ゴ、コレデ裂ケ
ル」
「ひっ!?(がぼっ」
「嫌ナラスグコレ、ケツマンニブチ
込ムゾ?」
「!!……や、やります…あうっ!」
「チャント奴隷トシテ相応シク」
「……ご、ご主人様…のチンポ……
僕がし、…しゃぶらせて頂きます…」



——ジュブッ ジュブッ

「ん…んむ……ぶふあっ」
「オオウ…グッドネ…ユーノ……」
「んぶっ……ん……」
「モット吸ウヨウニ……舌モツカウネ」
「……んっ」

——グチュッ チュ ハッ

(こんなの……なのには絶対見せられないよオ……)
「Oh…ソロソロ……ネ！」
「んうっ?!」



「イ……イクネ！」

ドブッ ドブブブッ!!

「!?ぶ…んはあっ!？」

ドクンッ ドブ……

「フ……フウ、ヨカッタネ」

「ゴホッ…ゲホッ……んっ…あふ…
ん……」

「……ドウヤラ、ユーノモヨク
ナッテキタミタイネ」

「コッ…え、それって…あ…っな、
な…に?!」(そんな……ほ、僕、
まさか男の人のをしゃぶっただ
けで…こんな……)

「ツギハミーガユーノニプレゼン
トフォーユーネ」

「え…な!?(ガバッ)



「あ……やあ…」
「ユーノココ、ガチガチ
ネ……ミーノヲシャブッテ
クレタカラ、デキノイイ奴
隷ニハゴ褒美ガ必要ネ」

シワ…………シワ……

「ああ……んあ……ひっ？」
「Oh…モウビクンビクン
シテルネ……カワイイ顔シ
テ意外ト淫乱ナCockヲ
ユーハブネ！」
「んっ…ふう、あ…や、やだ
……ぼ、僕……あ、ダメ…」



「ミーノ研究ニヨルト、マゾノ
牡犬ハ乳首モ性感帯ネ」

グイッ

「!? ひっひあああっ!?
だ、ダメェツ! つ、つねっちゃ
……お…あああ! ? や……
な、に…ああ…ら、らめえええ
えええっ! く、クルっ! ひぐう
っ! いっイ…」

ビクッ———ビュク

「あっあっ…あああああ
あああっ!!! い、イクウウウ
ううううううっ!!!!」



『——ふふっ、すごい格好
だね、ユーノ……』
「?!ふ、フェイト…ト…?」

カッ カッ……

『どうだった?その人のテ
ク…よかったでしょう?』
「フェイト…な、なにを…
そ、それにどうして…?ぼ、
僕はキミたちが誘拐された
と聞いて……」
『うん……きっとユーノな
らきてくれると思ってたよ
……優しいものね…』
「え……?」

「!？」
「うふ、驚いた……？」
「フェイト……？ど、どうして……」
「この人……いえ、この男性型
ドール……よくできてるで
しょう？」
「ど、ドール!？」
「そう、少し言語ルーチンに偏
りがある以外は、優秀なセクサ
ドール……”ご主人様”がくだ
さった私用のオモチャ……」
「そんな……フェイト……キミ
は……」
「んっ……ああ……ふふ……ユー
ノも私たちの仲間にしたくて
呼んだの……ご主人様の……
忠実で、淫乱なオモチャに……」



「んっ……そ、そう…もっと、よくユーノに見えるように……」
「フェイト……や、やめてよ！こんなの……おかしいよ！」
「あ…あふっ、う、うん……おかしい…ね…
でも、私のカラダ…もうコレなしじゃ我慢できないの……」
「そんな……」
「んふ…あ…ユーノも…すぐわかるよ……ご主人様の調教で……すぐに……」
「ち、調…教？」
「そう……ユーノのおちん○んも、すぐに私のオマ○コのようにだらしなくヨダレを垂らすように…してあげるんだから……」



「ほら……ユーノ…舐めて……」
「あう…ふ、フェイト…こんなこと……やめ…ワブッ」
「んっ！ふう……聞き分けの悪い子は、ご主人様に嫌われちゃう…よ？」
「んぐ……んむっうう！」
「あ…あはっ！んっく、くすぐりたいよユーノ……あ…」
「……ふ、ふはっ！ …くっ……あ……フェイ、トお…」

……クチ………ヒチヤク……

「あ……ん…んふ、急に素直に…なったねユーノ…ああ…いいいよ……」
「(フェイトのアソコ…すごく…ああ…いい匂い……)」



「んふ……ユーノのクンニ、上手だね…どこでおぼえたの？」
「あ……いや…それ、は…」
「ふふ…聞かないでいてあげる」
「あう……」
「これなら、ご主人様もきっと喜んでくれるね」
「ご主人……様？」
「そう、私だけじゃなく、ユーノのような淫乱マゾ犬のことも大好きな、優しいご主人様だよ……」
「そ、そんな……僕、淫乱なんて……」
「まだ認めたくないの？自分の本当の姿に……」
「え……」



「コレが証拠だよ……」
「んっ……あ…？」
「ほら、さっき、あのドールの
ペニスをしゃぶってた時も、
今私のオマ○コをクンニして
た時も、ここ、ずっとガチガチ
にしてたんだよ、ユーノは」
「?!そ、それは……そんな」
「男の子なのに、ユーノはこん
なボンテージで拘束されて、
変態的なプレイを強要されて
……ペニスをこんなに硬くす
るくらい興奮しちゃうんだね」
「ちっ違っ……あうっ!や…た、玉
……だめえ…っ」
「まだ納得できない?ここだけ
じゃないんだよ、ユーノの淫乱
なカラダが反応してるのは…」

「!…あ…や、だ、だめソコ…き、汚
いよ……」

「大丈夫……ほら、ここも…(ゲッ)

「ひぁあぁっ!?あ…な……」

「知ってる?ここ、前立腺って言っ
て、エッチな男の子はここを責め
られると……っ!」

「!!!!あぁあぁあぁっ!あっ
…あっ!あぁっ!」

「ね?こうやって女の子みたいに
可愛い声で喘いじゃうんだよ?」

「そ…そんな事、き、聞いたこと…」

「ふふっ…ユーノってばホントに
ピュアなんだね…」

「あう……ば、僕が…淫乱…だか、
ら……?」

「そう、ユーノが私と同じ、ご主人
様のオモチャになる素質があるっ
ていうこと……ご主人様に見て
もらおうね……私たちがどれだけ
淫乱な、マゾ奴隷なのか…」






——ギッ ギシッ——

「あ…ぐ…っ」
「苦しい、ユーノ？」
「あう……フェイト……ど、どう
して…こんな……」
「ふふ…、このほうが後ろからだ
とユーノのアナルがよく見え
るでしょ？」
「そ、そんな……(////)」
「それじゃあ、そろそろご主人様
に来て貰おうね…さっきからユ
ーノに会いたくてしょうがない
様子だったんだから……」
「え……？」

人



「な……なの…は……」
「ふふ、ユーノ君、そんなに驚かないね…ちょっとは予想できてたのかな？」
「あう……それ、は……」
「でも…そんなことより今はコレ(ピクピク)から目がはなせないみたいだね……」
「な…のは、それ、一体……」
「ユーノ君に喜んでもらいたくて用意したんだよ？」
「よ、喜んでって……あっ？」
「ユーノ君、さっきのドールのベニス、おいしそうにしゃぶってたでしょ？あれと同じ形状なの。どういうことか……わかるよね？」



「あむ……んふっ……」
「あはっ、フェイトちゃんったらしょうがないなあ…そんなに私のがほしかったの？」
「んむ……だ、だって……今日はこれ、ユーノのために使うんだから…せめてその前に……」
「フェイトちゃんはおちん○んが好きなんだね……可愛い(チュ)」
「んっ……で、でも誰のでもいい、ってわけじゃないよ…なのはのだから……」
「ユーノ君のはどう？」
「え……な、なのは？」
「んむ……ゆ、ユーノのは……う…ん……わ、かんない……」
「それじゃあ、試してみよっか？」




「え……あの、使うって……？」
「ああ、それはね……」

——ぐいっ

「あっ!？」
「これから、ユーノ君のお尻を私のふたなりチンポで犯すの」
「!!??そ、そんな…う、嘘でしょ!？」
「大丈夫、フェイトちゃんがユーノ君のアヌスも私のチンポもよく濡らしてくれたから——それに」

グキッ

「んんっ!」
「ユーノ君の前立腺、これでゴリゴリ責めたらきっと気絶しちゃうくらい気持ちよくなるよ?さっきのフェイトちゃんの指の何倍も……」



「ん…んあああっ！！」
「あ…あふっ…ユ、ユーノ君の
アナル……き、つ……」
「ひ……ぐ…あはっ…ユーノ
…あ、アツい…よう…」

ズチュ——グチュ——

「あ……や、だ…な、肛^{じょう}内で…
うご……」
「あは…ん……い、いい…よお
ユーノの……ちんぽォ…」
「す、凄い、ユーノ君の締付け
が良くて……」
「ひあああっ！や、ああああ
ああっ！」
「あ……い……あああああ」



—ズンッ ズンッ—

「あぁ…あ！や、やぁ……だ、だめ……
あ……も、もう…」
「んっ！んあっ！わ、私も……ゆ、ユー
ノ……い、い……」
「あふっ！あんっ！あ……い、いいよ
……ユーノ君、ユーノ君！！」

「「あっあああああああああああ
あああああああ！！！！」」

ドスドスドスドスドスドス



この同人誌を
つくったのは
誰だ……



終われっていわれた